

DRAMA かながわ

《神奈川県演劇連盟》 ★231-0042 横浜市中区福富町西通り52 TEL045-261-4866



神奈川県演劇連盟第3回合同公演

元禄 (いまよう)

いよいよ

稽古が加熱する！！

馬の物言ひ

神奈川県演劇連盟の第3回合同公演「元禄(いまよう)・馬の物言ひ」はいよいよ稽古たけなわ。

稽古場に借りている劇団蒼生樹稽古場と青少年センターの稽古場は熱気がむんむん。

劇団蒼生樹の公演と、かわさき演劇まつりの公演が終わって、合同公演に参加する劇団のそれぞれの活動も一段落。さあ、いよいよ全員が合同公演に集中！！、10月7日初日を目指して丁々発止の芝居のやりとりが始まる。

お芝居が髷物で、井戸端会議の長屋の女達は色気たっぷりの着物姿。はじめて髷物に挑戦する人もいるが、篠原久美子の小気味よいセリフが、馬がしゃべったというバカバカしい噂話事件ととも長屋の連中を事件に巻き込んでいく。

いやっ！ こいつは面白くなりそうだ！

まだ始まったばかりで台本を持っての稽古だが、演出の中村さんからは優しい物言ひだが次々にダメがでる。それを受け止めながらお芝居が変わっていく。はじめての相手役、これまで経験したことのない緊張感が稽古場にあった。

青少年センターに

演劇資料室 オープン

◆演劇の殿堂にふさわしい施設に◆

青少年センターのリニューアルを機会に、センターの中に横浜演劇研究所を入れてほしいという神奈川県演劇連盟の要望を神奈川県に申し入れたことから実現に至った「演劇資料室」が7月17日オープンしました。

この演劇資料室は、神奈川県の演劇文化の発展と青少年の演劇への関わりを深める上で、またとない施設になるに違いないと思います。

しかし同時に、横浜演劇研究所の全ての機能が移転したわけではなく、今後の横浜演劇研究所の活動と、演劇資料室の活動、運営をめぐって少なくない困難を抱え込むことにもなりました。

オープンしたばかりの演劇資料室はまだほとんど知られていませんが、オープン半月で入場者は80名を越えた。はっきりこの資料室を目的に、脚本などを探しに来る高校生もいるし、青少年センターの別のイベントに来てふらりと立ち寄る人もいます。

いずれにしても資料室を訪れる人の数、脚本を借りていく人の数は、これまでの横浜演劇研究所とくらべても格段に多い。これは地の利を得たことと、元々演劇の殿堂として演劇専用ホールを持ち、今回さらに多目的プラザ、練習室を併設したことで、それ



らの利用者が関心を寄せていることは確かです。

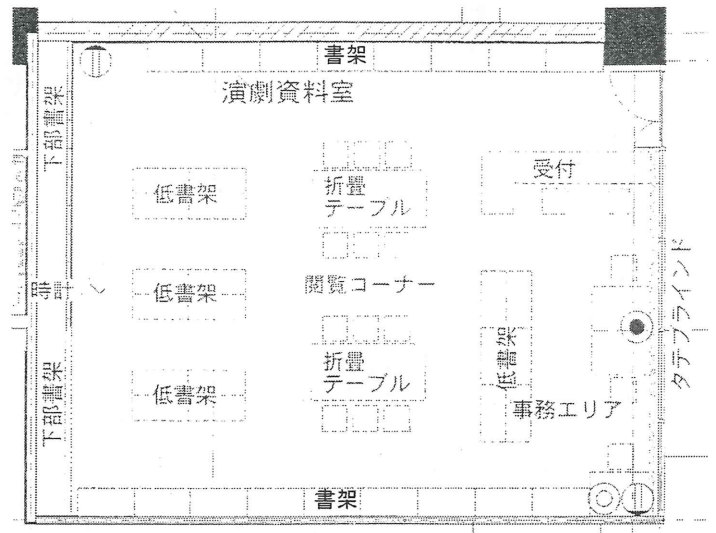
運営ボランティアに

神奈川県演劇連盟と横浜演劇研究所

演劇資料室は青少年センターの2階にあります。

入口を入ってすぐ左の階段を上がると、すぐ左が演劇資料室です。素通しのガラスで中は丸見えですが、そこに海外の古い演劇ポスターが4枚貼られています。大きなポスターで、なかなか素敵なアートです。横浜演劇研究所ではこうした資料を展示できる所を探していましたが、ようやくその一部を展示して見てもらえることにもなりました。

資料室の壁3面に図書・資料が並び、部屋の奥側に3列の書



架が並びます。日本の作品、海外の作品、高校生向けの作品、演劇雑誌など書架毎に作品・資料が展示されていて、今では手に入らない演劇図書も多数であります。

神奈川県演劇連盟と横浜演劇研究所が、この運営をボランティアで引き受けて、今後の運営に関わることとなります。しかし、どのような形で運営していくのが一番いいのか、まだ手探りの所も多いのが実情です。

来年度にむけて

ボランティアの財政援助など要望

そこで、開館そうそうですが、来年度の財政的支援の検討を青少年センターにお願いしました。開館早々になってしまったが、神奈川県の来年度の予算検討がまもなく始まるという行政のスケジュールに合わせて、現時点ですでに分かっていることを中心に次のようなお願いさせていただきました。

要望にあたって、先ず今回の資料移転とその運営に伴う経過と問題点を知ってもらうことが必要と考え、まず経過説明をさせていただきました。その主な内容は次のようなことです。

当初お願いしていた横浜演劇研究所の移転が、演劇資料室の開室ということになったため、横浜演劇研究所の機能全てを移動させることができず、これまでの運営体制を2分しなくてはならなくなりました。

これは横浜演劇研究所にとっても神奈川県演劇連盟にとっても大変なことで、それまでも横浜演劇研究所の専従者2名と神奈川県演劇連盟のボランティア1名によって何とか人的配置をしていたのが、2か所の運営をすることになり、明らかに人手不足になった。

さらに演劇資料室の開館時間が午前9時から午後5時、開館日が月曜日を除く毎日、特に演劇公演の多い金曜日・土曜日・日曜日・祭日もしっかりと人間の配置が必要なことである。これまでの横浜演劇研究所の開館時間が午前11時であったこと。日曜日・祭日は閉館していたことからすると、とても大きな問題である。

さらに横浜演劇研究所の日常調査・研究の仕事をしなが、会議等の対応もできたのですが、それができなくなり、必要な会議はいちいち別のところに行かなければならなくなったこと。横浜演劇研究所には神奈川県演劇連盟だけでなくいろいろな演劇関係の団体が連絡場所に使用していて、ごく当たり前にそこに集まれ

ば要件をすませることができたのがそうはいかなくなりました。これは言葉以上に非常に大きな問題で、演劇に関わる諸活動をスムーズにしていく上できわめて多くの制約を受けることになります。

このような状況をふまえ、次の4点のお願いをしました。

要望事項

- 1、「演劇資料室」の運営を、神奈川県演劇連盟若しくは横浜演劇研究所に「業務委託」していただきたい。委託経費の計上にあたっては、年間を通して主に土、日曜祝日勤務候補者の手当相当額、その他の日のボランティア要員の交通費等の実費支給を可能とする額を計上していただきたい。
- 2、横浜演劇研究所の全ての資料が収納または格納されるスペースを確保していただきたい。
- 3、従来の横浜演劇研究所の資料の印刷、発送などの日常活動が資料室で出来るようにしていただきたい。
- 4、神奈川の演劇関係者の交流の場として、資料室をつかえるようにしていただきたい。具体的には17時以降の時間の資料室を、県下演劇団体の意見交換の場として使えるようにしていただきたい。

これだけの演劇図書・資料の 充実したところは少ない

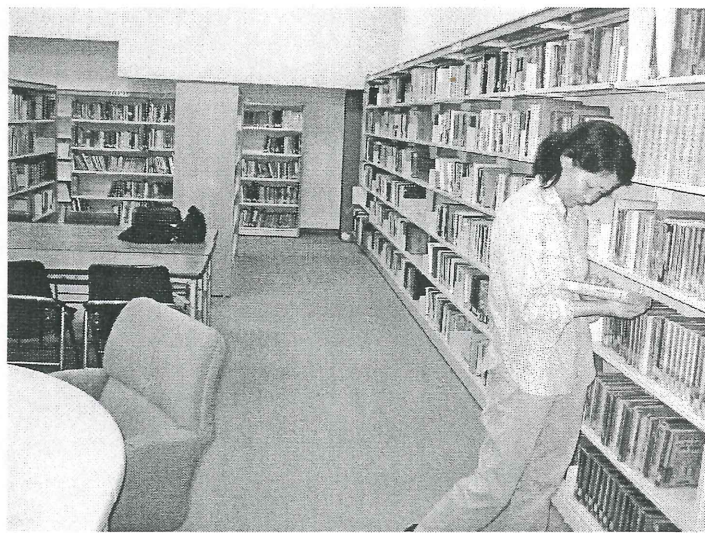
演劇資料室は大きな可能性を持っていると私たちは思っています。



資料室に列んだ演劇図書を見ていると、これだけの図書資料が集まっている所は早稲田の演劇博物館以外にはないだろうと思います。さらに資料の収集は続けられていますし、これからは今まで以上にさまざまな図書資料が集まってくることになるでしょう。

しかも今度は同じフロアーに多目的プラザというフリースペースの劇場と言ってもいい広場があり、演劇の殿堂といわれる改装された800名のホールもあります。

これらの施設を総合的に活用すれば、単に貸しホールの提供としてだけでなく、さまざまなエデュケーションプログラムを提供し、神奈川県演劇人との共同による創造作業が可能になるだろ



うと思います。

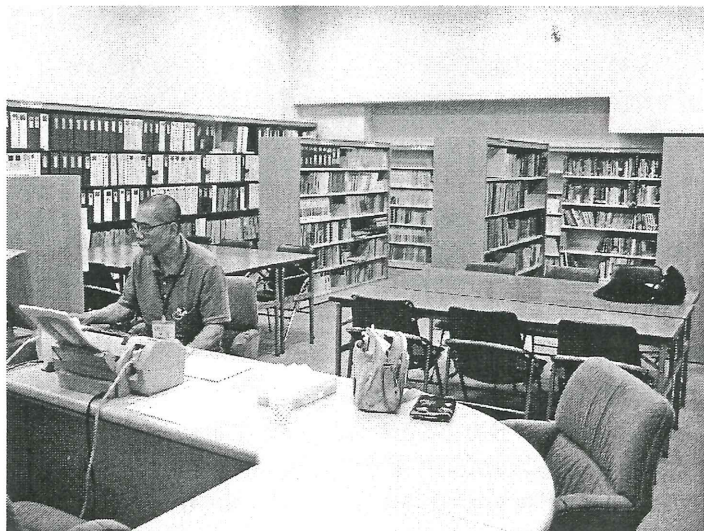
さらに発展して、演劇資料室に専門の学芸員を配置した演劇博物館として多様な要望に応えられるようになったら、その時こそ、神奈川の演劇の殿堂は本物になるのだと思います。

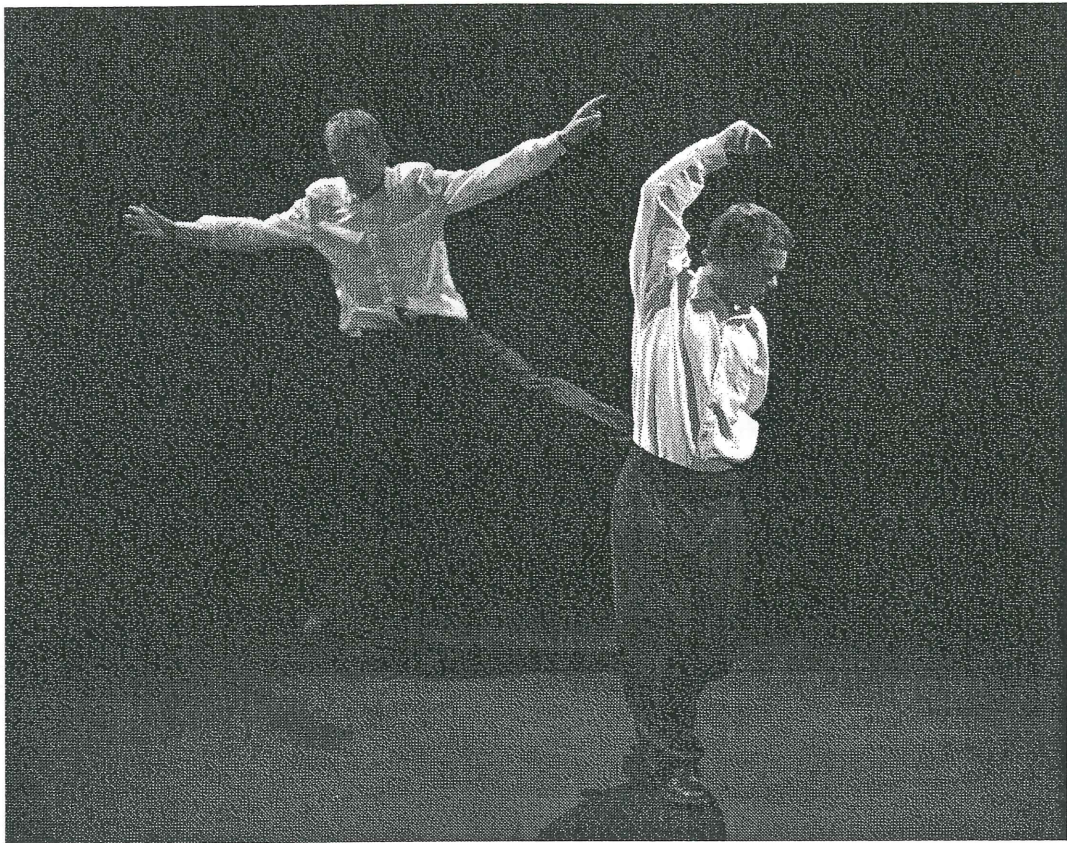
そのためには、困難なこの時期、力が分散されることなく、横浜演劇研究所と神奈川県演劇連盟と青少年センターのそれぞれの資源を出し合い活用し合っていくことが何より大事だろうと思います。

演劇の日常化のために 将来は演劇博物館に

二一とと呼ばれる若者が増えている今日、社会を見つめ、協同して作業する演劇を体験すること、演劇に触れて育つこと、演劇をすることで育ち合うことは、とても大事なことだと思います。横浜演劇研究所の創始者加藤衛氏は「演劇の日常化」を提起し続けてきましたが、それは横浜演劇研究所だけで完遂できることではなく、行政も含めた、文化・演劇に関わる全ての人々が力を寄せ集めないとかなわないことのように思います。

今回の青少年センターに開室された演劇資料室は、その夢を実現する第一歩を踏み出したものとして大きな期待を寄せるものです。





デンマーク・劇団テアトレット 「ディットー〜であい〜」 観劇の旅

山本 忠利

2005年国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ実行委員会が主催するキムジナーフェスタに、デンマークのテアトレットという劇団が「ディットー〜であい〜」というお芝居を持ってくるという話を聞いて、横浜世界演劇祭2006の事務局長団さんと一緒に出かけました。別日程で横浜こどもの広場の大原さんたち3人も沖縄入りして、たくさんの国際児童演劇を鑑賞する予定でおられたようです。

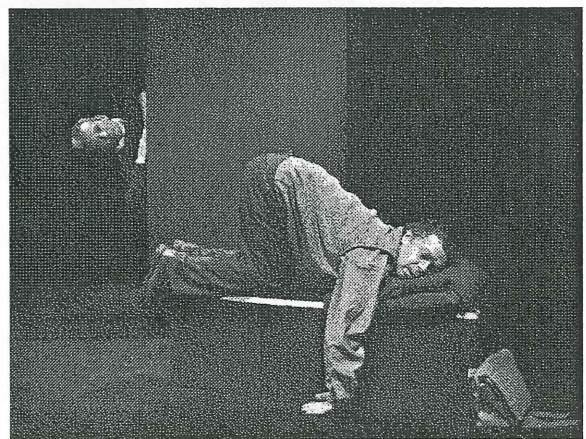
私たちの主目的は劇団テアトレットの「ディットー〜であい〜」観劇です。それは、横浜世界演劇祭2006の招聘公演の一つが同じテアトレットの「ディットー〜であい〜」であるため、どうしても事前に観ておきたいという気持ちがあったからです。

「ディットー〜であい〜」は秀逸な作品でした。これまでいただいた「ディットー〜であい〜」の写真などを見てもその物語や舞台の様子がイメージできず、何か抽象的なお芝居の印象をもっていました。

たとえば今回のプログラムにも「<客を迎えない家は、天使を迎えない>このアフリカのことわざからインスピレーションを得てつくられたことばのない作品です。出会いに潜むリスクと可能性がテーマです。何もない空間に向かい合うふたり。一人があらわれると、一人が消える……。国々のことばのカベのむこうに共通のコトバの世界がひろがっている。」と書かれています。しかしこの説明からは舞台をイメージできません。

始まる前に、「劇は静かに進行しますが、皆さんはおかしかったら大声で笑ってください」と案内があります。「え！、これって面白いお芝居なんだ！」というのが第1印象。先入観の抽象的なお芝居・・・というイメージがちょっと変更されました。

登場する二人の男がすれ違いながら舞台に出てきます。なんどかのすれ違いの後、一人が舞台にテープで線を引きます。もう一人もその線を見て、その線を動かしたり追加したりして、すれ違いながら共同の作業をしていきます。線は道路になったり、ベンチになったり、窓になったりドアになったりしながら、二人をだんだん近づけていきます。



1本の線を横に引き、それをベンチにして一人の男が座ります。このあたりから観客の笑いが出てきます。テープが織り成す様々な、しかし単純な線だけの仕掛けで次々に世界を作っていきます。警戒したり、小さな空間に閉じ込めたりしながら、やがて二人は親しくなっていきます。そこに言葉はまったくありません。

ここまでくると、プログラムの説明がようやく理解できます。

テープの線を様々に使って劇世界を構成するという発想の面白さだけでなく、「ディットー〜であい〜」は詩的な作品だと思います。それは演技者が生み出す繊細でリアリティーのある関係、



つまり二人の演技です。

空間は間口8メートル、奥行き8メートルの黒い幕に覆われただけの世界で、そこに小さな箱が二つ、大きな棚のような箱が一つだけです。そこに展開される二人のこまやかで気配りのある演技についつい引き込まれてしまいます。

まあそんな具合で、久しぶりに素敵なお芝居に出会いました。

お芝居がはねた後、横浜に来てもらうことになるので、舞台裏などを見せていただきました。

ここで思わぬ問題に遭遇したのです。

紹介したように、舞台には小さな箱が二つと、棚のようなちょっと大きな箱が一つだけなのに、外には1トンもの荷物の箱があったのです。そして、ホール前の庭には大きな特設の発電機がうなりを上げていたのです。

え！……、何をそんなに持ってきたの？ 何で発電機が必要なの？ ということになります。

答えはこうです。デンマークでは電気は200ボルトで、照明器具なども200ボルト。従って、自分たちがいつも使っているものでやりたいと、全部自前の機材を運んできたのです。変圧器まで。そして120V、240V、360Vの電源を用意してほしいという希望で、沖縄に1台しかない工用発電機を調達したのだそうです。

日本の照明担当の人と話をしました。同じ機材を持ってきたとしても、200V電源があれば、発電機の設置は必要ない、ということでしたが、それでも劇場に200V電源があるかどうかは

不明です。

一番いいのは日本の機材でやってもらうことですが、自分たちの普段使っているものでやりたいという先方の意向をどうするか問題で、沖縄では劇団の希望を尊重したのだそうです。

上手い解決策を探して、無事デンマークの劇団が来てくれる事をねがうばかりです。

ついでにたくさんお芝居を観てきました。

イギリスのCTCシアター「ヤングハムレット」と「発明家レオナルド」

イスラエル・アブラ・ヘブリュー劇場の「あかない箱」

台湾・九歌児童劇団「城隍爺傳奇」

沖縄・あしびなー自主事業実行委員会「おかしかなし月下乃道化」

横浜世界演劇祭の運営や環境ということも含めてみておきたい思いもあって、開会式にも入れていただいた。

言語のない作品は、それで分ることを初めから目指しているのできちっと伝わるが、言語を通して伝えようとするものは、やっぱり言葉がわからないと伝わらない。

子供の作品が多かったが、「ディットー〜であい〜」は格の違いを見せていた。

イスラエルの「あかない箱」が、「ディットー〜であい〜」とは別の意味で評判を呼んでいた。イスラエルのアラブとユダヤの民族問題を抱えているが、二つの民族の俳優が合同して作っている劇団で、兄弟が一つの箱を奪い合う抗争を通して民族問題を訴えようとしていた。そういう意味で注目されていた。

実行委員会の本部を会場群の中心におき、しかもかなり広い場所で、そこがチケットセンターになり、交流の広場になっていた。8日間に渡り公演が行われるが、連日そこに人が集まり交流していて、そこには夕食や飲み物のサービスもあって、食べながら、飲みながら論議が続いた。



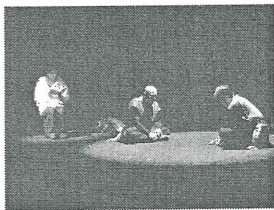
実行委員会はそのセンターで毎夜沖縄の島唄をうたうコンサートを催していた。歌手は毎日変わり、沖縄では名の知れた歌手が登場していた。

海外公演14演目、国内3公演。人間国宝の特別公演もある。海外劇団の公演回数だけで46回というすさまじい回数をこなしていたが、フェスティバルは和やかでお互いの公演を見合い友好的であった。

キムジナー・フェスタ3日間の参加は、たくさんの方を学んだ旅でありました。(7月24日～26日参加)

昨年は9劇団の参加で開催された神奈川県演劇博覧会が、来年2月の第3回目の企画にむけて動き始めました。

神奈川県演劇博覧会は、SAAC（横浜舞台芸術活性化実行委員会）の支援を受けて相鉄本多劇場で展開される企画で、実施は神奈川県演劇連盟が中心になって進めます。



神奈川県にはたくさんの劇団が各地で公演活動をしています。しかし神奈川県演劇連盟などに結集している劇団は少なく、それぞれの劇団の横のつながりはあまりありません。また横浜で公演をしたいという希望があってもなかなか実現しない劇団もあるようです。



SAACは横浜市からの助成を受けて演劇の活性化を目指す活動を援助していますが、神奈川県演劇博覧会の企画は、かこ1回目2回目共に、参加した劇団、鑑賞した観客にとって、大変好評でした。

参加した劇団にとっては、全ての準備を自分でする必要がなく、基本的には参加の姿勢で公演できるし、一緒になった他の劇団とも演技の面、スタッフの面で交流が出来ること、お互いの公演を見る機会が意外に少ないなかで、たくさんの違う劇団の芝居が観られることなど、結構刺激的だったことなどが上げられます。



また観客にとっても無料でしかも一か所で9劇団もの違った作品が鑑賞できるということはとても贅沢なことのように思えます。知人の芝居を観に来たがついでに他のお芝居も観ていったり、通りすがりに、ふらりと入って観ていったりという自由さが、気軽に演劇に触れる機会を作ろうという、企画の目的をそのまま実現していました。



来年2月は神奈川県演劇連盟などが企画する「横浜瀬奈剣劇祭2006」の期間と重なるため、この演劇博覧会も世界演劇祭参加公演として位置づけ、世界の演劇を鑑賞する一環として、神奈川県下各地の演劇を観てもらおうということになりました。

実際の運営は世界演劇祭と重なるため大変にはなりますが、きっと意義ある博覧会になると思います。

第3回

神奈川県演劇博覧会

世界演劇祭参加企画として準備進む

（写真：今年の舞台から）

芝居を観る

劇団かに座公演

作：香取俊介

演出：田辺晴通

メアリーという名の姉

楠田正宏（劇団こゆるぎ座）

創立55周年を迎えられた由、まことにおめでとうございます。

舞台はオイルショックで破綻した日本が、再び右肩上がりの成長を始めた昭和55年、巣鴨の老舗饅頭屋「笠戸家」の長女ミヤは、国際結婚で渡米し、牧場を経営するまでになった。たまたま数十年ぶりに父親の法事で帰国するという。一方、細々と生業を続ける饅頭屋は、借金の連帯保証人になってしまったため、返済を迫られ、挙げ句店舗まで取られかねない窮地、「よし、ここは姉さんに助けてもらおう」ところがどっこい、そう



は問屋が……笑いあり、ほのぼの家族愛ありの一部始終。

ベテラン勢に少々押され気味の若手陣だが、稽古を積み重ねた几帳面で狂いのない台詞のやり取りには、感心させられたが、群衆劇的な場ではもっと遣り合って欲しいし、遠慮がちな取り巻きの合いの手が、やや気になった。

ともあれ、テーマである「家族愛」は、十二分に伝わってきたし、完成度の高い作品でした。

装置面では、居間の真後ろの出入り（装置の狙い？）は、受け役者が受け辛そうだし、役者の登退場に、必要以上に目を奪われる。上手に配したガラス戸は、仕舞屋を思わせるし、ガラスの汚しで、外の芝居が見えなかったのは残念でした。

劇団麦の会公演 山口雄大 作・演出

夏の日の陽炎

劇団河童座 奥津祐司

戦争を体験してないものが創った戦争もの。
「戦争をどう捕らえ、考えて行くか」そんな問いかけを感じた作品だった。

物語は空襲シーンから始まる。防空壕に避難して来る様々な人々。生真面目で融通の利かない女班長(?)。乳飲み子を抱えながらも、たくましく生きる若き母親。出兵した兄を想う天真爛漫な女学生と、おおらかな母。その女学生に想いを寄せる勇気も自信もない男子学生。片足を引きずるヒョウキン者の男。etc.

登場人物は殆どが元気で明るい。

防空壕の中で何度か顔を会わせている内に、気が知れ「しんどい時にこそお芝居を」とアンパンマンちっくな劇中劇が始まる。

度重なる空襲にも係わらず、へこたれない面々。しかし戦火は次第に厳しくなり、それぞれの人が抱えている問題が浮き彫りに。息子の戦死・自分が生き残った罪悪感・赤紙・身近な者を守る事……。空襲は、そんな想いすら防空壕ごと壊してしまう。

「犠牲者が」思ったが、そこで知り合った全員が無事と判り、明るい空気で芝居は終わる。

歌や踊りや劇中劇が入り、9割方明るくて賑やかだった。でもそこには、悲しみや苦しみを乗り越えて来た人達が見えた。前を向いて必死に踏ん張って生き抜いて来た人達の姿が見えた。

「僕らも前を向いて必死に生きよう、そして忘れてはいけない。」そんな演出者からの、メッセージに思えた芝居だった。

惜しむらくは、明るさの底にある悲しみや辛さが伝わり切らなかった事。もっと深みのある芝居になったと思うと残念な気がする。



横浜小劇場 溝口勲・作 長谷川則彦・演出

チキン・カレー

劇団麦の会 山元洋一

作品は昨年度高校演劇大会優秀作品に選ばれたもので、全国1985校から4校という名誉を得たものである。

母親の頼みで怪我をした祖母の介護に上京してきた孫娘に、本格カレーを作れと命じる祖母、祖母はヘルパーさんが百人も交替したという頑固婆ちゃん。どうなることやら……

劇は祖母の指示で本格カレーを作らされる孫娘との会話を通して進められる。思いがけない孫娘の包丁さばきに驚く祖母、得意げに口ずさむ鼻歌に二度びつくりの祖母。早世した父の話に心が和んで、次第に会話は弾んでいく。

パンフに挟まれた匂い袋はカレーの匂い、パンフの地色はカレー色、と雰囲気作戦もとりに入れてちょっとさびしい客席をもりあげようとしていた。祖母役の高橋さんは頑固ばあさんを無難に演じてはいたが、カサブランカ(前作)で見た見事な人物像には及ばなかったように感じた。孫娘役の宮里さんは、さすがに現役高校生には見えなかったが、元気があって見ていて気持ちよかった。「こんなに物わかりいいのかな?」と思う節もあったが、六〇分完結ではいたしかたないか。

それよりこの作品の元は高校演劇での発表。作者は「一般社会人の手で上演された作品を是非見てみたい」と北海道からの上京を決めていたが直前で断念されたとか。でも僕は、この婆さんとヘルパーを高校生がどう演じ、どのような舞台に仕上がったのか、こちらの方が気になる作品ではあった。

劇団葡萄座公演 中谷まゆみ 作・宮城忠 演出

ビューティフル・サンデー

劇団蒼い群 村田次郎

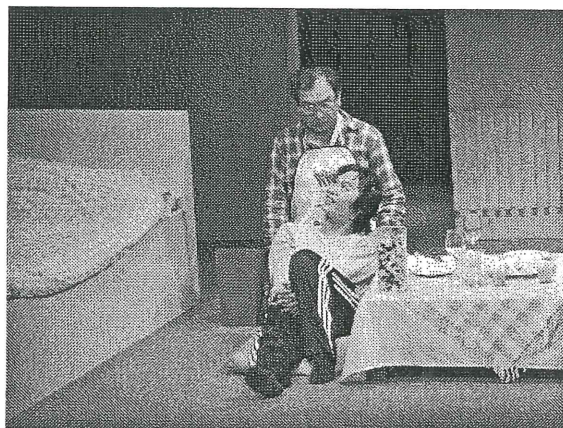
演出がパンフレットで言っていた「難解」であるということは、非日常的なことの積み上げで出来ているからであろうという理解は持った。

なおかつそれを気にするそぶりもなく堂々と事実を暴露しながら進行させる作劇

スタイルをとっているのが、確かに最後を観客がどう受け止めるかの一点に掛けているのかなと感じた。

その一点には共鳴したが、最後にはやはりどう受け止めたらいいか「難解」だった。私なりに非日常的に偶然が重なれば、いや、一步日常を踏み出せばこのような非日常的な生活にも出くわすこともあるのかなとも思ったが、喜びも悲しみも程々という感覚しかない私には、あまりそれを期待しても無理だろう。

やはり劇場を出て駅までの道をBeautiful Sundayの曲を口ずさみドキドキ、ウキウキ帰ったかどうかなのだろうなあ……



(京浜協同劇団・かわさき演劇塾・公募による市民参加)

かわさき演劇まつり

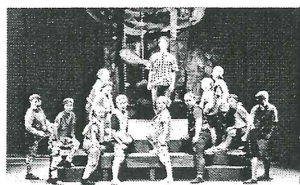
水上勉原作

小松幹生脚色・藤井康雄演出

ブンナよ、

木からおりてこい

藤田 るみ (かわさき演劇塾)



私が所属する川崎演劇塾が参加している合同公演、かわさき演劇まつり「ブンナよ木からおりてこい」の劇評を依頼された。自分の劇団の事なので、書きづらいついおうか、かなり複雑な気持ちである。しかし、この公演にほとんど関わることができず、道具も、稽古もまよこっただけ、本番すら一回、長野から駆けつけて観ただけで、内輪のはずなのに普通の観客と変わらないという、なんとも無責任な立場だった事もあり、劇評というものからはかなり遠ざかってしまうのをお許し願って(というより劇評はやはり関係のない方が書いてくたさるのがよいと思うので)、その上、見終わってから依頼されているので細かい所まで覚えていなかったりもする。そんないい加減な私がこの芝居を観て何を思ったか個人的感想を書かせていただくと思う。

私も長く関わってきた、このかわさき演劇まつりは「大人も子供も楽しめる」舞台を目指して創られ上演されてきた。しかし、今回、演じ手はそのところをどう考えていたのか？オープニングのダンスを見ながらそう思った。

本来、演劇には児童劇、商業、小劇場系、ミュージカル：などというカテゴリーなど必要ないだろうし、また、なんとなく存在するそのあいまいなカテゴリーの中でも優れているものやそうでないものがあるので、別に児童劇だか、そうじゃないからといって何が変わるわけでもない事はない。うまでもないのだが、今回、無意識に俗に言われるところの児童劇(念をおすが、児童劇だからいけないということではない)っぽく演じていると思われの人が若手を中心にかなり多いように思われた。

誰が見ても解り易い様に、演技を大きくしなくては、声を大きく出さなくては、元気がいっぱいに踊らなくては、という脅迫観念が前面に出てしまい、個々の魂の躍動が伝わってこないのだ。一番大切な、中身が伝わってこない。そこに生きている事、命のまつりのような演劇の姿が見え

てこない。歌い踊るのは、そうしなくてははいられないくらいに熱い魂の仕業だと思ふ。

オープニング、蛙たちが春を喜び生きる力に満ちているシーンのはずなのに、私には演じ手の頭のうしろにステップの順序や歌詞が浮かんで見えてしまった。内側から考えればそれぞれ事情があり、稽古不足なのかもしれない。アマチュアなのだから、ダンスや歌が苦手という人だっているのかもしれない。しかし、ステップが不安なら不安ならなくなるまで稽古する事は可能だし、稽古期間が少なければそのカンパニースキルに合わせた演出方法にするなりできただろう。いや、実は、誤解をおそれず乱暴に言ってしまうれば多少の間違いなど、普段は地道に仕事をし、時間をやりくりしながら共に助け合っただけの舞台に立つという興奮や楽しさでどうでも力バーできるのが、アマチュアの良いところだと思ふし、それは時として爽快で素晴らしい空間を生み出す力にもなりうるのだ。

でも残念ながらその土壇場の豪快な開き直りも感じられない。大きな劇場でお客様も入っているのに、とても遠くの小さい所で話が進んでいくような、枠の中に納まってしまっているような感覚だ。装置も演奏ブラスも寂しく見えてしまう。ブンナ達がガラスケースに閉じ込められているシーンは基本舞台の前面に照明でエリアを作り無対象で行われたがこの無対象も然りであった。

嘘は嘘だ。しかし、嘘ではないと心から信じた時、そんなことさえ意識しなくなった時、本物を越える真実が現れる。それが芝居の醍醐味だと思う。どうやらガラスケースに見えるマイムができるかという次元の表現からは当然、ガラスケースに閉じ込められた命の危機、焦燥、閉塞感や外が見えているのに届かない気持ちは読み取れない。

役の自分を舞台で自由にさせるためには、少しでも心にひっかかること、テクニカルな問題をすべてクリアにする稽古がやはり必要なのだと思う。できていると思いつているのは問題外だが、なんとなくガラスのマイムができないままでもいいと思つてはいけない。たとえ中途で本番になっているかどうかも努力したかどうか、その先に進もうとしているかどうかはすぐに解つてしまう。それに、できたところで身体的にやっとなユートリアルなそのシーンの居場所を確保できるというだけなのだ。

その先の作業は限りなくある。特に演劇塾は近年、稽古時間が思うように取れない事が大変な問題になってきているので多分に自戒を含め強く思つた。

後半になり、とんびにさらわれた雀やもず、へび、鼠のシーンになると、やっとな話の内容に引き込まれた。

ベテラン勢は嘘をちらつかせたりしない。当然、自分はこの話の中で生きているのだと肝が据わっている。観客と

体験を共有しようという意識が伝わり、前半置いていかれた感のあった客である私は安堵を覚えた。食物連鎖と片付けられないのが私たち人間だ。普段は誰かがバックにしてくれるお肉やら切り身の魚でごまかしている心に深く突き刺さる。他の命を犠牲にして生きていること。それだけの価値のある生き方をしているかということ。とんびの羽音のもたらす緊張感が劇場を包み、実際に大きなとんびの手が鼠をさらっていく仕掛けに大喜びした。傷ついた鼠が自ら死を選び、その屍からブンナの食べ物となる沢山の虫が生まれるシーンは何とも美しく、浄土をみついているようだった。そうだ、こうして新しい命に生まれ変わるのだ。そしてまた誰かの役に立つのだ。ああ、いい芝居だな。

・・・しかしここでも舞台上で蝶を操る人達、シャボン玉を吹く人達の大半の身体がまるで素のまま、興ざめしそうなものを感じなくてはならなかった。

ラスト、それまで反目していたケースの中の蛙たちが投げ込まれたえさをすべてブンナに託し、それを食べて力をつけたブンナがケースを飛び越えて、石をぶつけてガラスをわり仲間を助け出すシーンも、えさとぶつける石以外は無対象で、役者たちの力量に任ざられていただけに稽古不足や役者同士の共に創りだそうとする心不足からくと思われるアンサンブルの悪さが露呈されてしまった。個人個人が勝手に頑張つてもやっぱり駄目なのだ。

アマチュアにも素晴らしい役者さんが数多くいて、それでプロかという役者もたくさんいる。というのを前提にいうが、アマチュア(ここでは単純に俳優業でギャラのない人、職業が他に人々を指している)の役者でよく目に付くのは自分をどう面白く見せたいかだけにこだわっているという所だ。自分をよりよく表現したいという所からなんとか脱して、この芝居の良さを、どうやって伝えるか、そのために自分はどうあるべきかを考える。そういう人達が集つて創り上げ、大勢の人に見てもらふことで更に深まっていく演劇には命の尊さを伝える力があると思う。だから、この時代にこそ演劇は必要なのだろう。



子供と一緒に見られなかったのを残念に思いながら、観終わった後地震で大騒ぎになっていた東京をあとに急いで乗った長距離バスの中で偉そうにそんなことをぐるぐると考えていた。

編集後記

発行が1ヶ月遅れてしまった。大きな行事が重なっていて、機関誌の役割は小さくない。紙面を通して神奈川の演劇をかいま見る編集の仕事に関わってくれる人を捜しています。吾こそはと思う人來たれ!

神奈川県演劇連盟連絡先など

神奈川県演劇連盟事務所：横浜市中央区福富町西通5 2 横浜演劇研究所内
 ホームページ：<http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/>
 横浜世界演劇祭ホームページ：<http://www.yitf.jp/>
 青少年センター資料室 Tel：045-263-4400 (演劇資料室呼び出し)